

博士學位論文内容の要旨	
学位申請者氏名	北條 暁子
論文題目	平安・鎌倉時代文学の出産—母子・祖父と政治
論文審査担当者	主 査 大谷 俊太
	審査委員 坂本 信道
	審査委員 中前 正志
	審査委員 田淵句美子
本論文は、平安・鎌倉時代文学に見られる出産・誕生描写を対象として、歴史記録類から知られる御産の儀礼や慣習などの当時の実態を明らかにし、それと突き合わせることで、政治的意味合いをも踏まえた作品の解釈を行ない、その内容・表現の持つ意義などについて考察したものである。また、出産の対になるものとしての死別についても、『長恨歌』摂取による帝の亡魂探訪の和歌の考察を行い、その文学史的意義について論じている。 「Ⅰ 序章」においては、「出産・誕生・死別の描写がもたらすもの」として本研究の背景、目的と意義を論じ、構成を示している。 「Ⅱ 出産の部」は本論文の中核を為す。文学における出産・誕生描写について時代順に、「平安時代前・後（摂関）期」（第一編）、「平安時代末（院政）期」（第二編）、「院政期・鎌倉時代」（第三編）と区分した上で、第一編では『紫式部日記』、『枕草子』、『うつほ物語』、『夜の寝覚』を、第二編では『古事談』、『平家物語』、『頼政集』を、第三編では『平家物語』、『とはずがたり』を取り上げ論じている。具体的内容は以下の通りである。 「第一編 第一章 誕生を慶ぶ時——『紫式部日記』御産叙述再考」 先行研究は、『紫式部日記』の山場たる中宮藤原彰子の出産場面について、時間の流れを無視して重要な事柄を先取りして述べたあと、時間を遡って繰り返す強調表現と見做した。この通説は紫式部の筆致として『源氏物語』の読解にも五十年以上適用された。しかし、『医心方』等の医書・古記録の分析により、誕生直後は性別を伏せたこと、後産完了後に誕生と性別の公表が行われる事例が多いことが判明した。『紫式部日記』の三度の描写は、時間を無視するとの評価は誤りであり、時間の経過通りに実況中継のごとく、子の娩出、後産完了、性別公表の瞬間を描き留めている。すなわち、時間の経過に沿った臨場感にあふれた筆致で描かれており、紫式部の筆法全般への評価にも関わる事例であると指摘する。	

「第一編 第二章 後産までの久しさ——『枕草子』『権記』を手がかりに」

古典文学の後産（胎盤娩出）関連描写について、関連史料を指摘して読み解く。『枕草子』「心もとなきもの」の「子生みたる後の事の久しき」はどれほどの時間か。現代の医学書をもとに先行研究が「一時間以内」と数値化したが、明治以前には一日以上の遅れも見られ、時間の目安の無い心情的な久しさと読むべきであるとする。併せて、『うつほ物語』で後産完了後に臍の緒を切るとあるのは当時の慣習ではないかとした先行研究の推測の正しさを証明した。

「第一編 第三章 臍の緒を切る父——古本『夜の寝覚』再読」

一般に臍の緒を切るのは新生児の父が本来であるとする新説には賛否両論がある。原作『夜の寝覚』の先行研究は新説を退けたが、論拠に史料の誤読が認められ、新説が妥当である。旧説に則って特異な行動を取ったと見做されてきた父は、新説に則り、子の一生を後見する立場を表明したと読み改められる。この結論は、作品中の登場人物らの示す好意的な反応とも相応する。そして、ありふれた対応が殊更に記述されるのは、これまで誕生した寝覚の上所生の子に対しては父と名乗れなかったが、ようやく父として振る舞えたという対比を明確に示すためと結論する。

「第二編 第四章 臍の緒を切る母——『古事談』と璋子への評価再考」

鳥羽天皇の中宮璋子は、崇徳や後白河の誕生した御産において、自身が臍の緒を切った。臍の緒切り担当者は本来新生児の父であるが、父が天皇の場合触穢できないため、母の後見人が切るものであった。出産した母后本人による臍の緒切りは中宮璋子が初例であり、先行研究はこの異例を、璋子の気質や『古事談』の叔父子説と関連付けた。しかし、綿密な計画のもとに実施される儀礼は個人の意志を反映しにくい。璋子による御産時の異例は、むしろ摂関期と院政期の御産の性格の相違として評価し直せる。すなわち、上皇が皇子にとって「双方」の尊属となり得たことの端的な表れであり、その意味で、院政を象徴する事象と理解するのが適切であるとする。

「第二編 第五章 誕生を祝う祖父——記されない後白河院御幸」

安徳の誕生は、後白河院にとって望ましからぬものであったのか。『平家物語』理解への大きな鍵として、諸本のうち一本のみに描かれる安徳誕生四日目の御産所への院の御幸を考察した。この御幸は鳥羽誕生時の祖父白河院による「康和例」を先例とする。先例の選択から、白河—堀河—鳥羽 という正統に後白河—高倉—安徳を重ね合わせ、かつ、鳥羽と後白河との父子関係によってつないで、後白河を正統と位置付ける意図が読み取れる。誕生当時の安徳は、後白河院の皇統形成と永続のために必要とされていたと論じる。

「第三編 第六章 後深草院二条の御産と亡父——介助と家意識」

先行研究は、『とはずがたり』の描写の多くを後深草院二条のファザー・コンプレックスという「個性」に帰結させる。本稿の対象とする、皇子出産時に二条の見た「父による介助」という夢についても、先学は夫でなく父であることを特異であると看做す。しかし、古記録を分析した結果、当時の皇子女出産は実兄による介助など男性親族を含む「家」に支えられたこと、后以外では夫である上皇の介助こそあり得ないこ

とを確認した。二条の夢は家意識の表出と評価し直すことが妥当であるとする。

「第三編 第七章 速報としての甕落とし描写——『平家物語』御産巻、『とはずがたり』」

先行研究が『とはずがたり』の「甕落とし」描写を『平家物語』に倣ったと推測するが、文学描写上の類似というより、当該の儀式の副次的に帯びた機能が共通していたことによる類似である。甕落としとは、後産が遅れた場合に行う呪術であり、したがって、誕生および性別の判明後、かつ、その公表前に行われた。甕落としの方向は性別によって異なるため、甕落としは性別と誕生の速報的意味合いを副次的に帯びる。『とはずがたり』『平家物語』はともに正妃による皇子誕生の期待される御産において、誕生と性別が判明した瞬間を描いているのであるとした。

「第三編 第八章 後嵯峨院と両統迭立——院の死と二条の「虚構」」

先行研究は『とはずがたり』の虚構の多さをもって、物語的と評してきた。本稿は、先学が史実として受容する、筆者の亡父源雅忠の任大臣に関わる作中の主張について、古記録を分析した結果、虚構と位置付け直した。ただし、史実に反して後嵯峨院崩御直後に後深草院政が開始された場合には実現し得た内容であり、持明院統に属する読者には正当な主張と受容され得た。つまり、この虚構は『とはずがたり』の物語性ではなく、むしろ両統迭立の時代を反映した日記文学らしさを示しているとする。

「Ⅲ 死別の部」「第四編 平安～鎌倉時代の死と和歌文学 第九章 帝による亡魂探訪——『後撰集』「いづこをはかと」」

『後撰集』藤原伊衡女詠は「墓」という語を詠む和歌の嚆矢である。墓は和歌に詠まれにくい事象であり、したがって先行研究は、醍醐帝の夢魂が伊衡女の墓を探して訪れるという仮想について、辛くも回避できた望まぬ内容 と解釈した。しかし、『後撰集』伊衡女詠が一首の大部分を占めて表現するのは、帝による墓参という、現実にはあり得ない特異な夢である。唯一の先例は、『白氏文集』「長恨歌」「長恨歌伝」に描かれる、玄宗皇帝による、楊貴妃の没した馬嵬への訪れである。つまり、伊衡女詠は「長恨歌」摂取によって、魂を求めて墓を探し訪れられる永遠の愛を希望する一首であった。伊衡女詠は、死後も変わらぬ愛という概念を和歌に導入した作品と評価でき、『源氏物語』に与えた影響をも指摘する。

「Ⅳ 終章に代えて 出産・死別を文学として語る力」

後深草院二条の『とはずがたり』は、その描写や人物造型のみならず、『源氏物語』が文学形式として高めた「問はず語り」という構造をも『源氏』から学んだとする見通しを提示する。白居易の「琵琶行」を踏まえることが先学により指摘されている明石巻では、弦楽器の演奏を経て淪落の人同士が心を通わせ、問はず語りが可能になる。この要素を分かち持つのが『とはずがたり』巻四、五冒頭であり、須磨巻に於ける昭君出塞の故事の趣をも摂取する。こうした様相が作品名に反映された可能性を探り、引いては、問はず語りという文学形式と出産や死別が文学作品に著述されることとの関わりについて考察することを今後の解題とした。